

科目「保育内容演習Ⅰ」における子ども理解を目指した 実践的取り組みの一考察 教育実習現場からの課題を踏まえて

Considerations on the Practical Approach Aiming at Child Understanding thorough
Childcare Contents Practice I : Based on the Review from Teaching Practice

菜 原 桂 子*

Keiko NAHARA

I. は じ め に

本学では、幼稚園・小学校の教育実習に関して学生のより良い学びのために江別市・札幌市の教育実習報告会、札幌私立幼稚園との懇談、北海道私立幼稚園と幼稚園教諭養成校との連携による実習委員会等実習に関する情報交換・情報の共有等行っている。そこで、昨今の課題としてあげられるのは本学に限らずとのことではあるが、「子どもと関わることが困難な学生が目立つ。」「自分から行動を起こすことが出来ず受け身の状態にある。」との課題が挙げられた。実習園としての提案は、「実習前にできるだけ子どもと関わる機会を体験して実習に来てほしい。」「失敗を恐れずチャレンジする気持ちを持って実習に来てほしい。」とのことである。「そのための協力として、事前ボランティアや観察実習の受け入れも可能である。」との提案もある。

本学の学生が実習前に子どもと関わる機会は、自主的に参加するボランティア活動と系列の法人のこども園で2日間にわたる観察実習を行う事であるが、2年次5月中旬に行われる教育実習に幼稚園が求める積極的な実習の学びまでは、不足が生じるのが現状と言えよう。その解決策の一つにも位置付くのが、科目「保育内容演習Ⅰ」で授業の一環とし、学生たちが一丸となって実際に企画運営を行い、子どもたちの遊びの場を提供して体験的に学ぶ内容を行っていることである。保護者と同伴で多くの子どもたちが来学し、学生が作製や準備を行った遊びの場で子どもたちと実際に触れ合いながら展開して学びを深める活動である。この活動は、行事としての要素を多く含み、実践的に保育内容や子ども理解を学ぶ他、コミュニケーションに対しても、まだまだ伸びしろがある学生にとって大変意義深い学びの場となる。チームとしての活動に生じるあらゆる課題に直面して、解決を行う経験や人との関わりの中での気づき等、今後の成長に必要なことも経験する。

本稿は、この授業の取り組みで学んだことが、今後の教育実習・保育所実習・施設実習をは

*北翔大学短期大学部こども学科

はじめとした、保育者・教育者としての成長にどのように活かされていくことが期待できるのかを学生の振り返りから考察したものである。

Ⅱ. 教育実習の現状からみる課題

教育実習現場からは、過去の状況と比較してここ数年の傾向として、増加したと思われる点や新たに出てきた課題について意見が出ることが多い。例えば「子どもと関わらない」「保育者とうまく関われない」という人とかかわりについての状況がある。この点については実習の前段階の深刻な課題と言えよう。更には「極度の緊張が続く」「失敗を恐れる」「声が小さい」「挨拶ができない」というのは、年々増加の傾向にあるとのことである。また、少し前までは、厳しい指導で自信を失うことがあるため、褒めながら指導していたが、最近は褒められることも逆にプレッシャーになりモチベーションが下がってしまう事もあるようで、どのように働きかけていくのがぞましいのかも考えて行く事が必要になっているという報告が実習報告会や実習園との情報交換の場で挙がっていた。その他には「表現力が乏しい」「受け身状態」「自己肯定感が低い」等があった。実習生全体に対して、すべての課題ではなく実習生の中に見られる「傾向がある」「気になる」という観点のものである。

Ⅲ. 保育内容演習Ⅰの授業の概要

1. 保育内容演習Ⅰの授業の目標と実践内容

科目のねらい

保育内容の総合的な理解を目指し、子どもの発達過程に応じた遊びの内容や環境構成について学ぶ。実践する場として「こどもの国」の企画運営を行う。この取り組みを通して、表現力や創造力を育み保育者としての資質向上を目指す。

科目の到達目標

- (1) 子どもの発達過程に応じた遊びや保育の内容を構想し、展開することが出来る。
- (2) 保育・教育の環境構成を理解する事ができる。
- (3) 教材研究を通して、表現力や創造力を高めることが出来る。
- (4) 行事等における企画・運営の意義が理解できる。

取り組みの活動内容

「こどもの国」大学祭での開催

大学近隣の子どもと保護者を対象とし、北翔大学 短期大学部こども学科の各コースの特色を生かした遊びの広場を企画・運営する。

対象学生

こども学科 1年生 123名

音楽コース Aクラス15名

保育コース Bクラス25名 Cクラス20名 Dクラス20名 Eクラス15名

教育コース Fクラス28名

事前指導

- ①こどもの国の全体像の説明を聞き、保育の実践に向けた基本的な内容を理解する。
- ②こどもの発達過程に応じた遊びの内容・環境構成について学ぶ。
- ③人的環境としての保育者（子どものモデルとなる環境・子どもの理解者になる環境・共同作業・共鳴者としての環境・遊びの援助者としての環境）について理解を深める。
- ④造形遊び（接着・着彩・展示・配色・用具・材料）、教材管理・保存方法について理解する。
- ⑤チーム活動について（組織性・協働性・協調性とは）、保育者を目指すうえでの基本的マナーや規範意識について理解する。
- ⑥子どもに関わる上での留意点、保護者の対応に関する留意点について学ぶ。
- ⑦個々に遊び企画書の作成を行い、発表、グループワーク、決定を行う。

2. こどもの国の実践内容

実行委員：こども学科1年生 各クラス2名 計12名

指導教員：6名（内 音楽コース担当2名 保育・教育コース担当4名）

実行委員会開催：計8回

活動内容：

コース	クラス・人数	活動内容
音楽	Aクラス 13名	音楽コンサート 「器楽合奏・ベル演奏」「オペレッタ」「手あそび」「幼児体操」
保育	Bクラス 25名	制作あそび 「お店屋さんの食べ物作り」 6コーナー（ケーキ&ジュース・焼きそば&たこ焼き・ハンバーガー・クレープ・ピザ・チョコバナナ）のお店屋さんをつくり、フェルトで作ったパーツを用意し、子どもたちの希望の物を発達に合わせて作った後、できた作品をお土産にして持ち帰る。
保育	Cクラス 20名	ゲーム 「テーブルカーリングあそび」 3レーンをつくり、それぞれレーンとゴールに子どもたちが興味を持ちそうな模様をつけて、ストーンをすべらせてカーリングをして遊ぶ。ゴールに入れ終えたら手作りのメダルの景品をわたす。
保育	Dクラス 20名	ゲーム 「障害物 どうぶつバクバクえさやりあそび」 大中小の口の空いた動物を制作し、子どもたちは年齢に合わせてフープくぐりやケンケンパ、ジャンプなどの障害物の遊びを行い、最後はエサを動物の口に入れる。男の子には王冠、女の子にはティアラの景品をプレゼントする。
保育	Eクラス 15名	ゲーム「サッカーあそび」 海の中の風景にサッカーゴールをつくり、大きなサメが2体ゴール前で動いているところにサッカーボールを蹴ってゴールに入れる。2体のサメは学生が手動で動かし、年齢や子どもたちの様子に合わせて難易度を調整する。ゴールができるまで挑戦し、最後に手作りの風車をプレゼントする。

教育	Fクラス 28名	<p>ゲーム「まとあて」 大きい木（リンゴの木・みかんの木・ももの木）、小さい畑（いちご畑）をつくりマジックテープのついたそれぞれの実を年齢や子どもたちの状況に合わせて投げて木に貼り付ける遊び。ハイハイをする赤ちゃんはいちご畑にいちごを貼ったり取ったりして遊ぶ。景品としてスタンプラリーのカードとメダルを渡す。</p> <p>制作「びゅんびゅんゴマ作り」 厚紙とタコ糸を用意し子どもたちが好きな絵を書いて模様をつける。年齢や子どもたちの状況に合わせて教えながら作ったり、絵を書いた後に学生が制作するなどして、出来上がったびゅんびゅんゴマをその場で回して遊び持ち帰る。</p>
----	-------------	---

3. こどもの国の実際の様

来学者数：300人程度 内こども約150人



Bクラス：「お店やさんの食べ物作り」



Dクラス：「どうぶつパクパクえさやりあそび」



Eクラス：「サッカーあそび」



Fクラス：「まとあて」

4. 学生の振り返り

方法：振り返りシートを作成して記入する。

対象：こども学科1年生 保育コース80名 教育コース28名

振り返りシート内容：4項目

1. 準備活動の中で、特に大切にしたことや意識したこと
2. 協働の視点から気づいたこと
3. 当日の子どもとの関わりや子どもの姿から、子どもの行動や表現に対する気づき・子ども理解について学んだこと（事例を挙げて）
4. こどもの国の企画・運営全体を通して学んだことや、行事の意義について保育者・教育者を目指すものとして今後役に立てたいと思うこと

1. について (複数解答) 表-1

1	役割を分担して協力して行う	32人
2	効率よく行う・時間内に終了させる	7人
3	子どもたちが楽しむことが出来るように工夫した	32人
4	子どもにとっての安全性に関わる記述	29人
5	子どもにとっての遊びの環境としてふさわしいものとなるような工夫に関する記述	10人
6	子どもたちの発達に関する遊びの工夫について	8人
7	クオリティに関する記述	20人
8	作品一つ一つにテーマを持つ	3人
9	完成までの取り組みに対してのプロセスの重要性に関する記述	10人
10	保育者としての意識に関する記述	14人
11	活動に対して自分から積極的に行動するように心がけた	7人
12	責任感を持って活動する	8人
13	教材を丁寧に扱う, 無駄な使い方はしない	5人

2. について (複数解答) 表-2

1	コミュニケーションの重要性	17人
2	人に対する思いやりの心の大切さ	13人
3	協力し合う事と自分の満足度に対する難しさ	4人
4	仲間としての意識について	11人
5	役割を分担することの大切さ	33人
6	相手に意見を伝える時の伝え方の工夫	10人
7	ミスカバーし合う事の重要性	8人
8	人への感謝の気持ちを持ちそれを表現することの大切さ	5人
9	疑問がある時はうやむやにせず話し合う場を持つことの必要性	7人
10	積極的に言葉をかけ合う	18人
11	積極的に意見を出したり相談・報告を行う	17人
12	目的に対しての共通理解の大切さ	14人
13	良いチームワークについて意識すること	11人
14	みんなでモチベーションを維持できるような工夫が必要である	3人
15	リーダーシップ力とリーダーへの協力の大切さ	7人
16	個々の活動内容の理解と責任	5人
17	時間や約束は守り, 変更が生じた場合は速やかに連絡を行う	5人
18	信頼関係を持って活動することの重要性	7人
19	全体を見て状況を把握しながら活動する	9人

3. について (複数解答) 表-3

1	こどもの反応は個々に違い対応もその状況に合わせる必要がある	12人
2	自分では簡単だと思っていることも教えることは難しい	16人
3	どこまで援助して良いのかの判断が難しい	5人
4	自分の緊張は子どもにも伝わり笑顔で接することが大切	9人
5	同じ年齢でも個人差が大きい	10人
6	子どもの発想は幅が広く想定外のことが連続的に起きる	9人
7	作品を創る過程でも大きく個性が出る	13人
8	人見知りをする子どもはどの年齢にもいるので配慮が必要	18人
9	本物の食べ物ではないが食べる真似などして、子どもらしくてかわいらしい	8人
10	挨拶がしっかりできて言葉も綺麗だった	9人
11	子どもの想像力が素晴らしい	13人
12	制作をする力が思った以上に高く驚いた	8人
13	教える時には言葉で伝えるよりも実際にやって見せることが効果的	11人
14	子どもと接するときは、はきはきと表情豊かに接することが大切	26人
15	子どもと関わるのが大きな喜びになり保育者を目指すモチベーションにつながった	8人
16	立って接することは威圧感になるので子どもの目線に合わせる	9人
17	はじめて接するときは適度な距離感を確認しながらコミュニケーションをとる	10人
18	力を使う遊びは手を取って一緒に行う事で十分楽しめることが分かった	2人
19	子どもは遊びの中から新しいルールを生み出す力があることに驚いた	2人
20	単純な動きでも楽しかったら何回もやりたい気持ちになる子どももいる	4人
21	楽しい体験になるように説明の段階で工夫が必要	4人
22	子どもと関わることはとても楽しい・うれしい	23人
23	子どもの目線で物事を考える、何を言いたいのかをしっかりと受け止める姿勢が大切	8人
24	子どもの頑張ったことに対してしっかり反応することが重要	5人
25	子どもはとても素直で純粋、表情も豊かだと思った	10人
26	「すごいね。」「上手だね。」等、褒めると元気になって、やる気が出る様子	9人
27	子どもにとってはあらゆる現象が不思議に思えるようで感性が豊か	6人
28	子どもは色々なことに興味があり危険なこともあるので目は離せない	5人
29	うまく行かない時は励ますことでやる気が継続する	8人

4. について (複数解答) 表-4

1	チームとして取り組むことの意義	21人
2	子どもと接するときの留意点	48人
3	良い人間関係と信頼関係の重要性	6人
4	企画に関するノウハウや今回の失敗の改善点	26人
5	積極的に関わる実践力	14人
6	食育に関する遊びの展開	4人

7	不備の無い準備の実践	4人
8	こどもが楽しむための工夫と発想	20人
9	しっかりとした保護者対応	18人
10	子どもたちにわかりやすい説明の仕方	8人
11	子どもと共感して関わること	10人
12	失敗を恐れずに色々なことに挑戦すること	5人
13	子どもを受容するとき、子どもの目線に立つとき	8人
14	視野を広げて活動する場面	9人
15	保育に対してのPDCA サイクル	12人
16	達成感ややりがいの大切さ	7人
17	子どもについて知り得たことすべて	17人

IV. 考 察

1. について

全体を通して、事前指導①～⑦の指導内容が全体的に反映されている解答になった。特に表-1の1, 3, 4, 7, 10に関しての記述が多かったことからチームで活動するためにはどのようにするのが良いのか、楽しい活動でありさえすればよいという事ではなく、その中には必ず安全が保障されていることが大切である、保育者としてどのような立ち振る舞いや意識を持つことが重要なのかという事に視点を当てていたことが伺える。

2. について

表-2の1, 2, 5, 10の内容の記述が多かったことから、半期にわたる長期の活動の中で多くの人間関係に関するトラブルがあり、それを乗り越えた傾向がうかがえるのではないだろうか。表-2の6, 7, 14, 15はリーダーを行った学生の記述が集中した。意見を出し合う事の重要性、その反面まとまらない時の解決のあり方等難しく感じるという状況はどのクラスにも共通して見られる結果となった。教員側は人として、あらゆるシーンで関わる事への体験的な学びや葛藤に対する自己解決、協力し合いながら乗り越えていく力の育みを期待していたことから、見守る体制や自らの力で動く事ができるような働きかけを共通に意識した。

3. について

表-3は学生一人ひとりが個々に感じながら多くを学ぶことが出来た様子がうかがえる。実習に向けて少しでも多く子どもを理解する事は重要であり、実習現場でも求めていることである。入学して前学期終了後の活動のため、各教科で学んだ演習や理論の実際を目で見て触れて確かめる上での学びとなれば、大変意義深いものとなるのではないだろうか。子ども理解は、教科書上で学べることに限りがある。そのことから個々の学生の気づきから理解を深めることが出来たのではないだろうか。

4. について

表-4は実際の活動の中で新たに学んだことや、次はこのように行いたい等の、今後に繋げる反省点などが中心になっている。具体的にあげたそれぞれの内容を、今後のあらゆる活動のシーンを想定して行ってみたいと認識できたことは、個々の学びとしても意味のあるものになったのではないだろうか。

V お わ り に

これらの学びの効果がどのように教育実習に活かされて行くのかは、次年度以降の教育実習などに関わっての調査を行いながら、分析し考察を続けていきたい。筆者は理論的な子ども理解ももちろん重要であると考えているが、保育者・教育者として、一人ひとりの子どもの個性に関わることの喜びや楽しさを十分に感じ取り、子どもの笑顔や純粋さ、ひたむきさ、可能性を秘めた豊かな力に、日々胸が高鳴るような感動を覚えてほしいと願っている。

参 考 文 献

- 三宅茂雄他「新・保育原理」株式会社みらい 2018年4月20日
- 無藤隆監修・浜口順子「事例で学ぶ保育内容領域表現」萌文書林 2018年4月27日
- 菜原桂子「学生が考える教材作成の取り組み—子どもが楽しむ音楽表現の活動について—」『北翔大学短期大学部研究紀要』第56号105頁 2018年3月15日
- 菜原桂子「幼稚園教育実習・保育所実習における指導案の現状と課題」『北翔大学短期大学部研究紀要』第55号139頁 2017年3月25日
- 厚生労働省編「保育所保育指針解説」フレーベル館 2018年5月16日
- 文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館 2018年3月23日
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館 2018年3月29日